

## 陳栄捷先生と私

陳 来 (著)  
永 富 青 地 (訳)

### 【解説】

本稿の著者である陳来博士は1952年8月、北京生まれ（祖籍は浙江省温州）。文革中は内モンゴルに下放。当時から哲学に興味を持ち、閲読を許される唯一の哲学書である『マルクス・エンゲルス全集』を耽読したという。1976年に中南鉱冶学院（現中南大学）地質系卒業。1978年、文革後最初の研究生（大学院）試験に合格し、北京大学大学院哲学系中国哲学史専攻に入学。指導は鄧艾民教授。1981年、研究生卒業。翌年、再開された文系博士過程の第一期生として張岱年博士の指導を受ける。1985年、博士号取得。講義の傍ら、馮友蘭博士の助手として『中国哲学史新編』の執筆を助ける。1986年、副教授（助教授）、1990年教授に昇進。また、1993年には博士生導師となっている。その後、東京大学、ハーバード大学、関西大学、香港中文大学などに客員教授、研究員等として招聘されており、現在は清華大学国学研究院院長、清華大学哲学系教授である。著書は、単著及び編著を併せて五十点以上に上っている。

この極めて簡単な略歴からも判るとおり、陳来博士は文革後再開された中国の学術研究の第一期生として、常に注目を浴びる存在であり続けていると言えるだろう。

なお、陳来博士の主著の一つである『有無之境—王陽明哲学的精神』（1991年初版刊行、人民出版社）の永富による書評が本誌第二十六号（2021）に掲載されている。ご参照いただければ幸いである。

一方、本稿で陳来博士が思い出を語っている対象である陳栄捷（Wing-tsit Chan）博士はアメリカにおける中国哲学、特に朱熹（朱子）研究の第一人者であるが、その経歴、特に渡米後のそれに関しては、陳来博士が本稿において詳細に語っているので、ここでは渡米までの前半生について簡単に記しておきたい。

陳栄捷博士は1901年8月18日、広東省開平（現在の広東省開平市〔広東省江門市に位置する県級市〕）に生まれる。少年期において香港の拔萃男書院（Diocesan Boys' School）で学び、その後、広州の嶺南大学を卒業。1929年にはハーバード大学の博士号を取得している。同年帰国し、1930年には嶺南大学の教務長に任じられている。1936年にハワイに渡航後のことに関しては本稿に詳しい。

以上の駆け足による紹介からもわかるように、本稿は、中国における朱子学研究的の大家が、アメリカにおける朱子学研究的の大家の思い出を語ったものである。従って、単なる思い出話

にとどまらず、陳榮捷博士の学問について同情ある理解が述べられていることが最大の特徴である。

近年、日本においても、あるいは中国を含む世界中においても、それぞれの学問分野における大家が相次いで世を去り、人格と結びついた学問というものが成立しがたくなってきている。そのような中、陳榮捷博士という、だれもが認める朱子学研究的の大家に関する学問的、個人的な思い出を述べた本稿は、味読すべき価値を有するものと思われるのである。

なお、本訳稿の底本はもと陳来博士のブログに掲載されていた「陳榮捷先生与我」であり、現在、陳来博士による回想を集めた『流光日新』（陳来・楊穎編、山東画報出版社、2022）に収められている「海外伝唱最老師—陳榮捷先生与我」とは若干の異同があるが、陳榮捷博士の経歴についてより詳細な記述のある前者の方を底本としている。また、本稿掲載の写真は全て、後者所収のものを、陳来博士の同意のもとに掲載したものである。（記者）

陳榮捷（Wing-tsit Chan）先生は二十世紀後半期における欧米学術界公認の中国哲学の権威者であり、英語圏における中国哲学研究のリーダーであり、また国際漢学界での新儒学と朱熹研究の大家である。

陳榮捷先生は1937年よりハワイ大学の正式の教授として、中国哲学と中国文明課程の講義を担当しておられた。1940年にはハワイ大学哲学系の主任を兼任された。1941年12月に太平洋戦争が勃発したのち、ハワイ大学が一時閉鎖されたため、1942年にアメリカ東北部の名門校であるダートマス大学（Dartmouth College）に転任し、比較文学系の訪問教授に任じ、次年度に中国文化教授に転じ、のち中国哲学教授に改められた。1951年にダートマス大学の人文学院の院長に任じられたが、これは当時のアジア人がアメリカで任じられた最高の学術的職位である。1966年に六十五歳でダートマス大学を退職し、中国哲学と文化の名誉教授（Professor Emeritus of Chinese Philosophy and Culture）を授与された。この年にペンシルバニア州ピッツバーグのチャタム大学（Chatham College）の招聘によってグリスピー（Anna R.D. Gillespie）講座の教授となり、1971年に任期を満了したが、なお継続して同校において中国思想課程の講義を教授し、1982年に完全に退職した。

1965年に先生はコロンビア大学中国思想訪問教授として招かれ、1975年には先生は同校の中国思想兼任教授となり、Wm.T.ドバリー（William Theodor De Bary）教授とともに1991年まで宋明理学を講じた。1975年以降は、先生はアメリカ東部理学研究グループの主席となった。先生は1978年に台湾中央研究院の会員に選ばれ、1980年より二年間、アジア及び比較哲学会の会長となった。1939年に哲学界の著名人数人とともに「東西方哲学会議」の創設を發起し、1989年までに六度にわたり会議を行っている。先生は長期にわたり期刊『東西方哲学』の編集委員を担当され（1950－1967）、その後、顧問に就任された（1967－1994）。

先生がダートマス大学を退職される前は、まさしくアメリカの中国哲学研究がスタートしたばかりの時であり、先生はしばしば各種の百科事典の中国哲学の部分の執筆を依頼され

た。例えば『ブリタニカ百科事典』(*Encyclopædia Britannica*)の「中国哲学」、「儒家」「道家」「理学」などである。60年代における欧米の百科事典の中国哲学の部分はほとんどすべて先生の執筆になるものであり、1966年に先生は『哲学百科全書』の中国哲学の部分の主編となられたが、同書は世界の哲学界の共同編集であり、世界の哲学界の著名人が編集委員となっており、全八冊、五百万字であった。先生は欧米の学術界において東方の哲学文化思想を最も完全に紹介した大儒として称えられた。先生の『中国哲学資料書』(*A Source Book in Chinese Philosophy*, Princeton University Press, 1963)はアメリカにおいて極めて広く流布しており、中国哲学を学ぶ者の必備の書とされているが、本書は全四十四章、856頁、専門用語には必ず注釈が附され、引用文は出典が明記され、注釈は三千条餘りに及び、重要な概念にはすべて評論が加えられ、さらにその中国哲学史上の意義が指摘されている。先生は英語世界において中国哲学の名詞や範疇についての翻訳に最も力を尽くした学人であり、その訳語は英語世界において規範とされ、研究者によって重視されている。

先生は四十年来、アメリカの中国哲学研究の重要な推進者かつ指導者、東西の文化哲学に通じた元老であるが、アジアの哲学の権威であり、理学研究を推し進めるうえにおいて、貢献が最も大きかった。1966年にWm.T.ドバリー教授が「明代思想国際研討会」を主催したが、会議の論文集はドバリーの主編であって先生に捧げられている。1970年にイタリアにおいてドバリーが開催した「十七世紀中国哲学国際会議」、1972年にハワイ大学が開催した「王陽明哲学国際会議」、1974年にアメリカ学術団体联合会とドバリーが主催した「中日儒家実学思想国際会議」、1977年に杜維明が主催した「清代思想国際会議」、1978年に陳學森が主催した「元代思想国際会議」、1981年にドバリーが主催した「韓国思想国際会議」などにおいて、先生はそのいずれにおいても積極的な参加者かつ推進者であった。1982年に先生が「国際朱熹會議」をホノルルにおいて始められたことは、当時における美談として伝えられている。1989年に第六回「東西方哲学会議」(SIXTH EAST-WEST PHILOSOPHERS' CONFERENCE)がハワイの東西センターにおいて挙行されたのもまた、先生が成し遂げられたことであった。コロンビア大学の理学研究会は毎週一度、ドバリーの主催によって行われていたが、先生は毎回必ず、昼にピッツバーグから、ご自分でサンドイッチを持って参加され、午後に研究会が終ると、夕闇の中、帰られたものである。

先生はご自分でおっしゃられているが、「私はアメリカで中国哲学を講じること五十年になるが、四つの時期を経過している。第一は中国思想の紹介、第二は典籍の翻訳、第三は中国哲学の範疇を討論したこと、第四が朱子の研究である」。アメリカの五十年代以降において中国思想の研究と学習を開始した学者の中で、先生のお蔭を被らないものはなく、あるものはその門下生として、あるものは奨励を受け、あるものはご指摘を受けたが、アメリカを訪問した中国人学者は特にお世話になったものである。先生は青年の学者に対して非常に親切であり、質問には必ずお答えになり、和やかで親しみやすかった。

先生は若い時に広州で度々講演をなされ、第二次大戦期において、1944年にはパウル・

バック（Pearl S. Buck）女士の招待によって、アメリカ東南部の諸州をめぐって講演されたので、講演の才能を非常に備えらえていた。私は第六回「東西方哲学会議」の会上において先生の御講演をお聞きする機会があったが、先生は中国語と英語とを自在に操られ、声には張りがあり、厳粛な中にも諧謔を交え、人を感じ入らせるものがあり、聞くものはみな絶賛していた。

先生は教えて倦むところを知らない指導者であるとともに、自己を厳しく律する儒者であり、生平酒もたばこも嗜まなかったが、一日として読書しないことはなく、人に接する際には、とても親しみやすかった。先生は数年前に台北である賞金を受けられたが、直ちに学校に寄附され、私に、「死後、すべての蔵書をコロンビア大学に寄附するつもりだ」と告げられた。

六十年代初期以降において、先生はさまざまな百科事典に寄稿されるほかは、主要なエネルギーを次第に新儒学（理学）の研究に向けられるようになった。先生の英訳『近思録』（*Reflections on things at hand : the Neo-Confucian anthology*, New York : Columbia University Press）は1967年に出版されたが、その中で参考になっているものは日韓の著作が多く、注釈や説明は非常に細密かつ詳細なものである。先生はその生涯最後の二十年において、学術的関心のすべてを朱熹の研究と朱熹の研究に関するプロジェクトの推進とに集中された。1982年には陳榮捷先生が組織、準備しさらには大会主席を担当された「国際朱熹会議」がハワイのホノルルにおいて挙行されたが、会議には現代における東西の著名な朱熹研究の専門家が結集し、この度の会議は世界における朱子学術研究のピークであったと言えよう。この会議の成功は朱子の研究を大々的に促進したのみならず、また陳榮捷先生ご自身にとっても重要な達成であり、先生の国際的な学術界における名声をさらに高めたのであった。1982年以降において、陳榮捷先生が出版された朱子研究の著作の大部分は中国語で発表されたが、それは『朱子門人』（台湾学生書局、1982）、『朱学論集』（台湾学生書局、1982）『朱熹』（世界哲學家叢書、東大図書公司、1990）、『朱子新探索』（台湾学生書局、1988）、『近思録詳注集評』（中国哲学叢刊32、台湾学生書局、1992）であった。このほかに、中央研究院中国文哲研究所が出版した陳榮捷先生の論文集である『新儒学論集』（台湾学生書局、1982）、『宋明理学之概念与歴史』（中央研究院中国文哲研究所、1996）も主として朱熹と関係する論文を集めたものであり、陳先生の朱子学に関する専著と合わせて参照すべきものである。

先生は六十歳から八十歳の間において、ますます朱子の研究に集中されるようになったが、この時期における成果としては1982年において刊行された二部の中国語の著作である『朱子門人』と『朱学論集』とを挙げることができる。このうち前者においては、朱子の門人の人数構成、地理的關係、社会的背景、学術的貢献などについて詳細に考証や研究を加えているものであり、先生の朱子学研究に関する分厚い蓄積を示すものであって、この卓越した著作の貢献と地位とは、世界における漢学の朱子学研究において、トップクラスに位置す



るものである。後者の『朱学論集』は、先生がこの時期において記された朱子学関係の論文を収めたもので、そのなかにおける『新儒学の集大成としての朱熹』、『朱子の仁説を論ず』、『朱子の近思録』、『朱陸の書簡のやり取りの詳述』などはみな陳栄捷先生のこの時期における重要な論文であり、その立論の反論を許さない正確さ、分析の深さ、資料の豊富さなどは、朱熹思想の理解を前進させる上において、非常に有用なものであり、また陳栄捷先生の「朱子研究における新材料の発見を」重視する姿勢を体現するものであった。この二冊の一流の朱子研究の著作と国際朱熹会議の組織の非凡さとは、陳栄捷先生の世界の朱子学研究における主導的地位を確立するものであった。八十歳以降においても、先生は老いてますます盛んであり、朱子研究の方面においてさらに一頭地を出だすものであった。1986年に先生は八十五歳の高齢で中国語による大著である『朱子新探索』を完成され、1988年に出版したが、本書は百二十六章に分かれ、そこで論じられている朱子の生平、思想及び関連する人物や事績などの様々な課題は、日韓及び我が国の学者の今日に至るまで論及しなかったところであり、以前においては注意されなかった大量の新たな材料を発掘し、朱子研究の課題を細部に至るまで深化させたものである。本書は疑いもなく、陳栄捷先生の朱子学研究の造詣の深さが、すでに熟練の境地に達していたことを明示するものなのである。先生ご自身もまた本書を自身の学術研究の最高の達成を示すものであると認められている。1990年に先生が台湾において世界哲學家叢書の一冊として記された『朱熹』が出版されたが、その中においては先生の多年にわたる研究成果が吸収されており、理論的分析と文献考証の両面において更なる深化が見られるのである。1992年に『近思録詳注集評』（台湾学生書局）が出版されたが、本書の「集評」の部分は『語類』、『文集』、『四書集注』、『或問』等の朱子の著作よりの資料が八百条餘に達し、さらに中国の注釈十八種、朝鮮八種、日本三十七種、筆記四十八種の中より、張伯行、茅星来、江永等の注釈と朝鮮、日本の学者の評語五百条餘を引用している。本書は『近思録』に掲載されている六百二十二条の資料のすべてに対してその出处を考え、引用している評論千三百条餘は皆その出处を列挙しており、学ぶものを益すること大なるものがある。本書の「詳注」の部分においては、『近思録』本文に関する典籍、術語、引用語、人名、地名等に対して詳しい注釈が加えられている。また本書の各巻において引用されている「程子」の言に対しては、すべて『遺書』、『外書』、『文集』などの証拠に基づき、それが明道の言であるかあるいは伊川の言であるかを確定している。そして明道の語であるのに誤って伊川とされたり、伊川の語であるのに誤って明道の語とされたりしているものは、みな訂正されているのである。本書の成果の着実かつ完備していることは、はるかに前人を凌駕しており、学界の宋代理学の研究に対する貢献は大なるものがある。

上述の数種の朱子に関する中国語の著作の外に、先生にはさらに英語による朱子学の論著があるが、それは以下のようなものである。『近思録－新儒学文選』（既出）、『新儒学の語釈：北溪字義』（*Neo-Confucian terms explained : the Pei-hsi tzu-I*, New York : Columbia University Press, 1986）、『朱熹的生活和思想』（*Chu Hsi : life and thought*, Ch'ien mu lectures v. 1984,

Hong Kong : Chinese University Press, 1987)、『朱子新研究』(Chu Hsi : new studies, Honolulu : University of Hawaii Press, 1989)。また編著には『朱熹与新儒学』(Chu Hsi and Neo-Confucianism, Honolulu : University of Hawaii Press, 1986)がある。陳老先生の英文による朱子学関係の著作の貢献は、欧米の学界の新儒学研究の中において疑いもなく頂点に位置するものである。

触れておくべきこととして、先生は朱子を尊ばれたが陽明を批判しはしなかったことが挙げられる。新儒学の研究について言うならば、先生には陽明学に関する中文および英文の重要な著作があるが、それらの中には英文の著作である『王陽明〈伝習録〉及其它著述』(*Instructions for practical living and other neo-Confucian writings*, Records of civilization : sources and studies ; no. 68, New York : Columbia University, 1963)の外に、中文の著作である『王陽明伝習録詳注集評』(台湾学生書局、1983)、『王陽明与禅』(台湾学生書局、1984)などがある。新儒学の外、先生はさらに中国哲学に関するその他の英文の著作も多数執筆されている。

先生の学問の方法は、概念史的な分析を重んじるものの、史実の考証を軽視せず、西洋哲学の深い教養を持ちながらも、「朱子によって朱子を理解する」ことを唱えられ、一次資料を重視し、門戸の見を超越し、日韓の学者の研究成果を利用することを特に重視しておられた。先生は歴史の脈絡から思想の発展を観察し、概念の分析から学派の変遷を検討されており、学風は平実かつ緻密であり、手法は精密かつ謹厳、その学風と手法とは朱子学研究の模範たるに恥じないものである。

当今の中国哲学研究の領域中において、陳老先生は私の最も尊敬する先輩の学者であるが、先生は学術的な成果で世界的に著名であるのみならず、その徳望の高さは、だれもが認めるところである。私は先生の晩年になってようやく知遇を得ることができたが、多くのご恩を蒙っている。

1981年に、鄧艾民先生の御指導の下、私は先生の英語の論文である『論程朱之異』(程朱の異を論ず)を翻訳したが、この年の秋に杭州で開かれた宋明理学討論会に陳先生が参加されることになったため、私は訳稿を鄧艾民先生にお渡しして、参会の時に陳先生に見ていただくこととした。先生は私の拙劣な翻訳に対して批判を加えられなかったばかりか、訳文の一ページ目に「訳文甚精」(訳文、甚だ精し)などと記され、激励してくださったのは、望外の幸せであった。この訳文は後に『中国哲学』第十輯において発表することができた。

1983年に先生は『中国哲学年鑑』のために『大陸中国哲学研究評述』を記されたが、その中において私の小文を特に取り上げてくださったことは、私を非常に鼓舞するものであった。先生はのちにこの件のいきさつを以下のように述べられている。

「私は1982年に国際朱熹会議を主催し、世界の朱子学の権威に一堂にお集まりいただくことができたが、日本の理学の大家である山井湧先生は、「朱子の『理生氣也』(理、氣を生ず

るなり)の語は『文集』『語類』『集注』などの本において見ることはできないので、もしその出典をご存知の方がおられたら、お教えください」と述べられた。私はもともと宋儒が引用した語の出典を調べることに関心を有していたので、会議終了後、『文集』『語類』や、朱子のその他の著述を詳しく点検したが、収穫はなく、大いに失望した。翌年、北京において中国社会科学院中国哲学研究所の座談会に参加し、『中国哲学史研究』1983年第二期を頂いたところ、その中の陳来先生執筆の『關於程朱理氣學說兩條資料的考証』(程朱理氣學說に関する二条の資料の考証)を見て、急いで読み終えたところ、この語が呂楠之の『宋四子抄釈』に見られることを初めて知り、急いで山井湧教授に告げることができたが、これは実に我らの望外の喜びである。陳先生は単にこの語の由来を考証されたのみならず、それが基づくところの『朱子語略』の流布の状況をも詳述されており、陳先生の考証の精密さ、その治学の方法の厳密さは、実に当代の学者の中において稀にみるものであると深く感嘆した次第である」。

実は1981年春、私は大学院生として論文を執筆していた際、張岱年先生に、「侯外廬等の『中国思想通史』の中で、朱子の「理生氣也」という言葉を引用していますが、私は『語類』と『文集』のいずれにおいても見つけることはできませんでした。その出典はどこなのでしょうか」とお尋ねしたことがあった。張先生は、「このことについて、今まで誰も注意したことがなかったので、君がもう少し探してみたらどうかね」とおっしゃった。二週間が過ぎたがなお探し出すことができなかったため、私が馮友蘭先生のお宅に行ってお伺いしたところ、馮先生は、「このことについては数日前に張先生もおっしゃっていたが、この言葉の出典がどこかは分からないね」とおっしゃったものである。張先生がこのことで私を助けるために馮先生にお尋ねくださったことを知り、私は心中非常に感激した。1982年夏に、北京図書館で『朱子抄釈』を調査した際、私は「理生氣也」の出典を見つけて、『語類』朝鮮古写本序における手掛かりと結び付けて一篇の文章を記した。張先生は私がこの問題を解決したのを見て、『中国哲学史研究』に推薦してくださったが、それは1983年に発表されたのである。この小文は、国際学界の年長者である陳榮捷先生の注意を引き、多少なりとも好評をいただいたのである。実のところ1982年夏のハワイにおける朱子学会議においては、もともと鄧艾民先生が、私が青年学者として参加するように推薦して下さっていたのだが、しかしその後、割り当てられた人数が足りなかったため、会議側が中国国内においては五十歳前後の学者を青年学者の割り当て分で参加させることにしたものである。従って私はこの重要な会議に参加することができなかった。先生は私のこの小文のために、私に対していささかなりとも印象をお持ちになったものである。

私は1986年の秋に東アジア研究センター (Center for East Asian Studies) の研究員としてハーバードで訪問研究を行うことになり、アメリカ到着後、杜維明先生に、陳榮捷先生と連絡を取ることができないかをお尋ねした。杜先生は12月に台北で漢学会議に参加しに行く際、陳榮捷先生にお会いするので、その旨お伝えすることができるとのことであった。そこ

で私は手紙を書いて、杜先生に台北での学会の際に陳老先生にお渡しいただくようお願いした。「陳老先生」というのは、杜維明先生に倣っての、私の陳榮捷先生に対する呼び方である。陳老先生は台湾からアメリカに戻ったのち私に返信を下さったが、私の時間があるときにニューヨークのコロンビア大学で、先生とドバリーが共同で主催しているSeminarに参加すれば、長時間話をするができるだろう、とのことだった。1987年4月に先生はボストンでアジア学会（AAS）を開催されたが、出発前に杜先生に手紙を送ってきて、杜先生と私とともにケンブリッジで「共飯」（一緒に食事をする）をしようとのことであった。杜先生はすぐにケンブリッジ市マサチューセッツ大通りの常熟餐厅を予約された。当日、杜先生はさらに途中でハーバードの趙儷生先生をお迎えになり、一緒に食事をするようになった（図一）。



【図一】 常熟餐厅にて。向かって左が陳榮捷博士、右側が陳来博士。

私はこの度、陳先生とお会いする際、1985年に完成した二冊の博士論文（タイプライターで打ったもの）を先生の指正に供し、さらに『朱子書信編年考証』の「編例」を贈呈し、本書に序を賜る際に便利ようにした。私はさらに持って行った中華書局の出版されたばかりの標点本『朱子語類』を陳老先生にお贈りした。ほどなくして、先生からお手紙があり、博士論文に対しては肯定的なご意見を多くいただき、さらに『朱子書信編年考証』の序文もお送りいただいた。先生は序文の中で以下のように述べられている。「今、その『朱子書信編年考証』の執筆はすでに完成しているが、それは行状、本伝と詩文書札という朱子自身の文章からの考証のみにとどまらず、朱子と同調する講友門人等の文集から、『語類』や諸家の跋語に至るまでの資料から年代を推定しており、その博引傍証、朱子自身およびその関係者の資料の把握、治学の精密さは、嚴密の至りといえることができる。このような基礎のもとに



年代を確定しているため、二千餘の書簡の前後の順序を、整然として見るができるようになった。今後学ぶ者は、朱子の思考の発展の痕跡を見ることができるため、その中の中年未定の見と、晩年定論とを、いずれも過たず確実に知ることができる。このように本書は朱子の生平と思想との研究に対して、その貢献の大なること如何ばかりだろうか！昨年秋に陳先生は、はるばるハーバードに來られたが、今年の春にようやくお会いすることができ、一見してお会いするのが遅すぎたことを残念に思ったことだった。考証の体例をお見せいただき、私に序を記すようにと依頼されたのだが、私は本書が画期的なものだと深く信じる故に、非常にうれしく思い、帰宅してそれを記すものである」。陳老先生からの手紙と序文とは一種の細長いわら半紙の上に記されており、全部で八ページだった。読者が容易に見て取ることができるように、先生の序文の中には、私の研究に対する激励の言葉が多くみられる。実際、私はその時、35歳の副教授にすぎなかったが、先生は現代世界における中国哲学の重鎮かつ大先輩だったのである。先生のこのような青年学者を推挙しようという大師の風格は、私を愈々感動させたものであり、このことは一生忘れることができない。

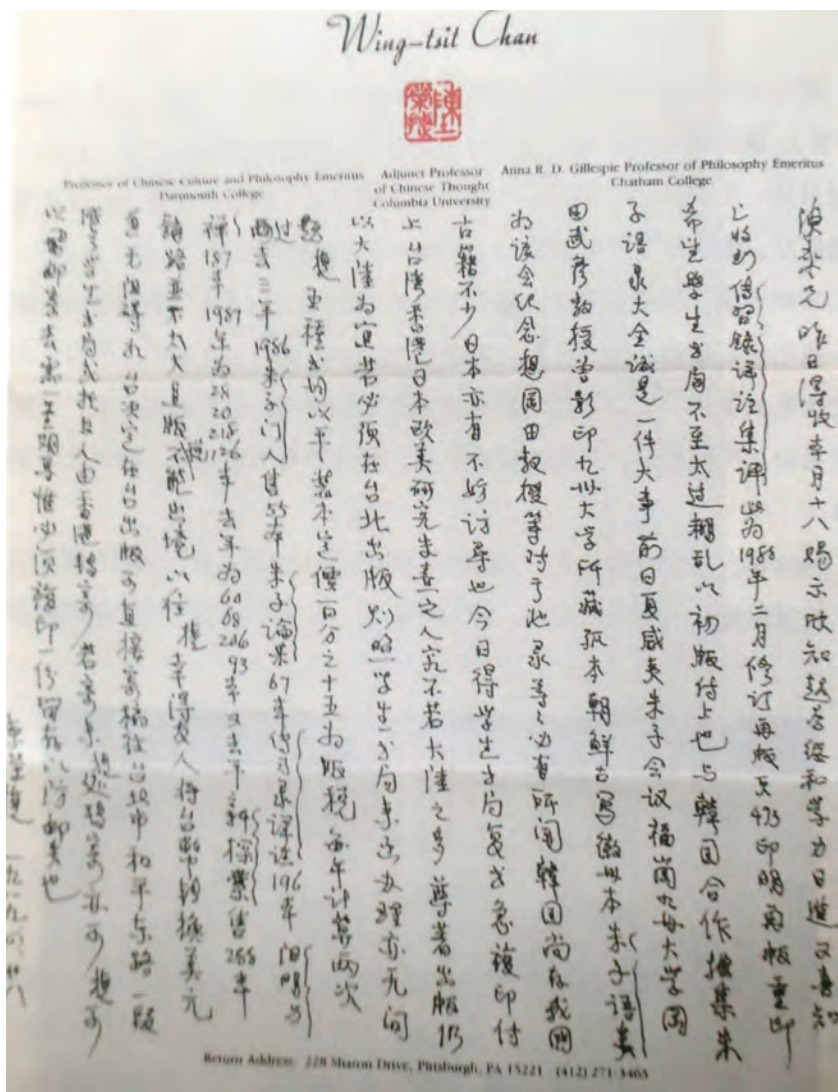
1988年春に、先生のご推薦によって私はコロンビア大学で講義を行ったが、その内容は主として朱熹哲学の研究であり、毎週先生とお会いすることができた。帰国後も先生とは連絡を取り続け、毎月必ず書信の往来があったが、述べられていることはすべて学問に関することであった。

1988年に、先生は『朱子書信編年考証』が未だ出版されていないのをお知りになると、台湾学生書局に手紙を送り、本書の台湾での出版を促した（図二）。

1989年の春に学生書局は北京の学会に参加した台湾の学者である龔鵬程に依頼して私と交渉させ、台湾での出版について大筋で合意したが、この年の夏に上海人民出版社が本書の簡体字版を刊行したのち、学生書局はもともとの計画を放棄したのであった。

1989年の夏、7月に私はハワイの第七回国際中国哲学討論会と第六回東西方哲学会議に参加したが、二つの会議は時間的に連続しており、いずれもハワイにおいて行われた（図三）。

東西方哲学会議に招待され参加した人数は比較的少なく、中國大陸から参加して発言したのは私と湯一介先生であり、その他の招待された先生方はいずれも参加できなかった。張岱年先生は参加されず、馮契先生も参加されなかった。台湾から参加したのは沈清松であり、香港から参加したのは劉述先であった。東西方哲学会議の会期は比較的長く、私の印象では、一二週間あり、我々はリンカーンセンターに滞在していた。私は覚えているのだが、ハワイ滞在時に、劉述先が杜維明に沈清松の意見を伝えたことがあったが、それは今回の会議に招待された台湾の学者が少なすぎる、というものであった。実のところ、招待者の人選は杜先生が決定したものではなく、例えば私の招待は陳榮捷先生が強く推薦したものであった。当時、杜維明は李沢厚を推薦したが、陳榮捷先生は同意されず、「李は中国哲学に対し



【図二】台湾学生書局からの出版を促す、陳榮捷博士の陳来博士への書簡。内容は以下の通り。「陳来兄 昨日得收本月十八賜示、欣知起居緩和、学力日進。又喜知已收到『伝習録詳注集評』、此為1988年二月修訂再版、頁473印明再版重印、希望學生書局不至太過糊亂、以初版付上也。與韓國合作搜集朱子語錄大全、誠是一件大事、前日夏威夷朱子會議福岡九州大學岡田武彦教授曾影印九州大學所藏孤本朝鮮古寫徽州本『朱子語類』、為該會紀念、想岡田教授等對於池錄等等必有所聞、韓國尚存我國古籍不少、日本亦有、不妨訪尋也。今日得學生書局復書、急復印付上。台灣香港日本歐美研究朱熹之人究不若大陸之多、尊著出版仍以大陸為宜。若必須在台北出版、則照學生書局來函辦理、亦無問題。捷五種書均以平裝本定價百分之十五為版稅、每年計算兩次。過去三年、1986『朱子門人』售55本、『朱子論集』67本、又去年『伝習録詳注集評』196本、『陽明與禪』187本。1987年為28/20/218/126本。去年為60/68/206/93本。又去年『新探索』售288本、銷路並不太大。且版稅不能出境。以往捷幸得友人將台幣轉換美元、並無阻碍。如台決定在台出版、可直接寄稿往台北市和平東路一段198號學生書局、或托友人由香港轉寄。若寄來捷處轉寄亦可。捷可以飛郵寄去、需一星期耳。惟必須複印一份留存、以防郵失也。

陳榮捷

一九八九、四、廿八」



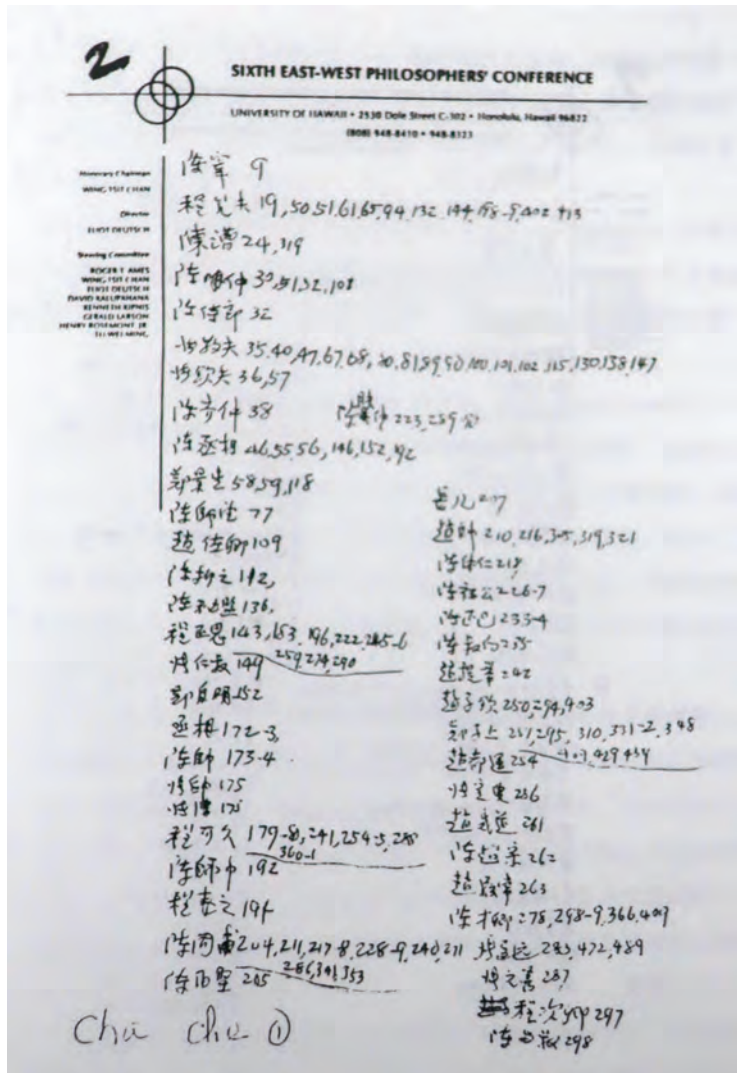
【図三】 1989年7月、ハワイでの第六回東西方哲学会議にて。向かって左が陳来博士、右側が陳榮捷博士。

て何の学術的な貢献があったかね」とおっしゃって私を招待するように主張したのである。またこのハワイでの会議において、車を待っていた時に、陳榮捷先生は私を指さして、国際中国哲学会の副会長であり、カトリック大学アメリカ校（The Catholic University of America）の柯雄文と台湾政治大学の沈清松に向かって、「私が彼を推挙したんだよ！」とおっしゃった。私が思うに、このこともまた、私の学術的研究とそのレベルに対する大先輩である老先生の考えを、海外の学者に知らせたものだったのである。

1987年7月にハワイで举行されたこの第六回東西方哲学会議において、先生は大会の組織者として、中国の学者の招聘について、何人かの著名な哲学者を招聘されずに、特に私の名を挙げてこの度の会議に招聘されたことに、私は深く感謝するものである。私がアメリカへと赴いた際には、『朱子書信編年考証』は出版されたばかりであり、私は飛行機でまず上海へ赴き、そこで同書を受け取ったのちに、ハワイへと赴いたのである。ハワイ到着のその日に、それを先生にお渡しすることができた。すぐに大会となったため、しばらく先生にお会いすることはできなかった。三日目の朝の朝食の際に杜維明先生は私に、「しばらくしたら、君は申し訳なく思うことがあるはずだよ」と言った。話していると、陳先生は安樂哲教授を伴って現れたが、先生は上機嫌で私に、「思った通り、君は私の期待を裏切らなかったね!」とおっしゃった。私が思うに、これは先生が私のために序文を書いてくださった際に



は、まだ原稿をご覧になってはいなかったが、幸いにも先生が序文で示された評価と期待に、本書の内容が合致していたという意味だったのであろう。その後、先生は私に原稿を渡された。もともと先生はこの二日間の会議の間に、『朱子書信編年考証』のために索引を作られたのだが、それは二十頁近くあり、先生は安楽哲教授に頼んで何部かをコピーして、私にもその一部を下さったのである（図四）。



【図四】 陳榮捷博士手書きの『朱子書信編年考証』の索引の一枚目。

私は気づいたのだが、杜維明が言っている「申し訳なく思う」（慙愧）の意味というのは、私自身か上海人民出版社が『朱子書信編年考証』に索引を附けるべきであり、陳榮捷先生のような老先生に索引を作らせるべきではなかった、ということだったのである。英語、日本



語の学術的著作にはほとんどの場合において索引があり、それは読者に対して多大な便宜を与えているのである。しかるに中国語の学術的著作には一般に索引が無い。特に、出版経費の不足のため、80年代における我が国の出版社は学術的著作の注釈でさえも削除してページ数を減らすことを希望するほどであり、当然索引を付けることを考えるはずはなかったのである。本書の性質からして、確かに検索の便を図るために索引を附することは必要であった。この当時すでに九十近い老先生のなされたことは、再び皆を感動させ、我々に対して何が学術の大師の風格であるかを示すとともに、先生の索引に対する重視と、索引を作成される能力の強さを明示したのである。陳老先生の啓発のもと、私はずっと、本書の再版の際に、陳老先生が作成された索引を附して、先生に対する感謝の念を示して記念することを望んできたが、その機会を得ることができなかった。そののち2011年に刊行された三聯書店の新印本（陳来學術論著集所収、2011年1月）には索引が附されたが、これは旧本に比して大きな進歩だった。しかしながら、この度の新本に附された索引は、陳老先生が作られたものではなかった。なぜならば、2003年3月に、当時、中国社会科学院の博士課程の学生だった王風君が私に、コンピューターで作った本書の索引と排列とを送ってくれたが、彼の索引と排列とはより精密なものだったので、この度の新版では彼の索引を採用し、陳老先生の索引を使わなかったのである。しかしながら私個人の陳老先生に対する感謝の念は、永久に忘れえぬものであるため、私はこの度出版された新本を、すでに亡くなられていた陳榮捷先生に捧げ、私の気持ちを表したのだった。

1989年秋に先生は北京に来られ、孔子誕生2540周年記念討論会に参加され、国外の学者とともに総書記と会見された。会議終了後、先生は私と一緒に中国農業科学院の種子庫を見学されたが、それはこの種子庫が先生の御子息の設計になるものだったためである。この時は六四事件の直後であったが、私から見ると、先生が歴史的見識を持って対処されていることは、常人になしうることでなかった。翌年の冬、先生は九十の高齢でありながら厦門の朱子会議に参加され、武夷山に遊び、朱子の墓参りをされたのだった。私はこの会議には参加していなかったが、先生は会議の際に中国社会科学出版社の要請に応じて、私の『朱熹哲学研究』（中国社会科学出版社、1988）の書評をお書きくださり、文中しばしばお褒め頂いたことで、私は非常に感激したのだった。

書評の中で先生は以下のように述べられている。

「本書は陳来の北京大学哲学系で研究を重ね、張岱年教授の指導の下での博士論文であり、中国社会科学博士論文文庫編輯委員会の審査を経て、博士論文の中の少数精英が選抜され、1987年に刊行・出版されたものである。本書は四部に分かれているが、それは「理氣論」、「心性論」、「格物致知論」と「朱陸之辯」である。巻頭に張岱年の序、巻末に後記があり、「その中の諸説は繰り返し深く考えたもので、一度に得られた結論ではない。しかしながら愚鈍の性質と研究の不足のために、深くかつ微細な部分については、なお備わらざることを自覚している」と述べているのは謙遜の辞である。実のところ、このようなレベルの高い博士論

文は、中国においても国外においても多くは見られないものである。

本書の長所は三点である。叙述が異常に完備していること。分析が異常に詳細であること。考証が異常に精密であること。このほかに、著者が朱熹本人の著作を多く用いていることも、また一つの特色である。叙述の方面では、理気論においては理気先後、理気動静、理一分殊、人物理気の同異をそれぞれ論じている。心性の方面では、已発未発、性の諸説、心の諸説と「心統性情」（心は性情を統ぶ）をそれぞれ論じている。格物致知の論は、格物と致知、格物と窮理、そして知行の問題を含んでいる。朱陸の辯においては、第一章で鵝湖の会の前の朱陸思想、第二章で朱陸の辯の歴史的発展、第三章で朱陸哲学の主要な分岐をそれぞれ論じている。秩序は整然としており、贅言は全くない。

太極動静を論じては、「太極含動静」（太極は動静を含む）というのは本体の微の上から説くもので、「太極有動静」（太極に動静有り）というのは流行の著即用の上から説くものであると指摘している（32頁）。これは一方では周敦頤の太極は動くことができるという思想を保証すると同時に朱熹本人の太極は理であって理は動かないという思想をも保証するものであるとしている。ここでの分析は明晰で、見事な観察といえる。「理一分殊」を論じては、宇宙の本体と万物の性との同一性を論証し、本原と派生の関係を論証し、普遍的な規律と具体的な規律との関係を論述するとともに、理と事物との関係を論証している。分析は細微であり、いまだ聞いたことのないものである。人と物との同異に関しては、朱子の思想がいまいな点について様々な角度から批判しており（61～63頁）、至れり尽くせりといえるものである。

……この討論の中において、「人自有生」の四つの書簡は中和旧説であり、何叔京の「昨承不鄙」と「人自有生」に答えた四つの書簡と同時期のもので、「答何叔京書」は丙戌（1166年）に作られたものであり、張拭に答えた四つの書簡が丙戌と丁亥（1167年）のものであると考証している（100～104頁）。これらは本書の中において注目すべき点を抜き出したのであり、その中の少数の例にしかすぎないのである。陳来には『朱子書信編年考証』（上海人民出版社、1989年）があり、朱子の二千餘の書札について、その執筆時期を断定している。その数量の多さ、考証の着実さにおいて、王懋竑の『朱子年譜』と錢穆『朱子新学案』のはるかに上をいくものである。従って朱陸の書信に関しては、みな詳細にその執筆時期を考証している例は、枚挙に暇がない。さらに『朱熹觀書詩小考』、『朱子家礼真偽考議』、『関于程朱理気学説兩条資料的考証』、『王陽明越城活動考』、『略論諸儒鳴道集』等もあり、経験は豊富であり、成績は具備している。上述の中和諸説に関する書簡の外にも、延平（李侗）に会った二年後にはすでに異学の非を悟っていた（274頁）、「作用是性」（作用是れ性）は波羅提の語であって達磨の語ではない（343頁）、王懋竑が『太極説』を南軒（張拭）の作とするのを改正し（124頁）、「枯槁有性」（枯槁性有り）の問答は甲寅（1194年）と乙卯（1195年）との間にあり（71頁）、張拭が初めて朱子を識ったのは癸未（1163年）のことであり（105頁）、『知言』に関する論は庚寅（1170年）に始まり辛卯（1171年）に終わり（118頁）、義理の性と血

気の性の区別は門人陳埴之の『木鍾集』において初めて見え（144頁）、『大学中庸章句』の作は『論孟集注』の原稿の完成よりも早く（199頁）、『大学』補伝は淳熙初年（1175年）に『大学章句』の草稿が完成した際に完成している（200頁）、李方子の『朱子年譜序』は黄榦の『行状』の後に出ている（258頁）、陸象山が崇安の主簿になったというのは待次にすぎず（300頁）、傅子淵は朱子に南康で会ったのではない（313頁）、等々を考証しており、このような類は、枚挙に暇がないほどである」（『哲学与文化』十七卷第十二期、哲学与文化月刊雑誌社、1990年12月）。

先生は国際的な朱子学研究の権威でありながら、始めの部分で三つの「異常」という語を用いて本書の長所を述べられ、その後さらに具体的に本書の考証上において獲得した重要な結論について、それぞれ指摘されており、大家よりの手書きの書評は、拙著に対する巨大な支持であった。1990年8月に私は先生に手紙を書いて、王陽明に関する拙著がすでに脱稿し、現在印刷中だが、扉の献呈の辞を先生に捧げたい旨をお願いした。先生は返信において「愚将与有荣焉」（愚、将に榮有るに与〔あづか〕らんとす）としてそれをお許しくださったが、これによって私は多少なりとも先生のご厚意に報いることができたのである。

先生の人となりは清廉かつおだやかで、後学に対しては奨励を尽くされ、一生の力を中国哲学思想の研究と紹介とに注がれ、その学問は非常に謹厳なものであった。ご著書のうち『朱子門人』、『朱学論集』、『朱子新探索』は今世紀における朱子学研究の最も重要な成果である。中国哲学思想研究の領域において、先生は唯一の中国語世界と英文世界の双方において主導的な地位にあった学者なのである。

1992年夏に、一年にわたって先生のお手紙がなかったことから、心中甚だ不安を感じた。秋に台湾滞在中に、朱榮貴兄から聞くことができたのだが、一年前に先生は外出の時に転ばれて病院に入院されたのだが、それは健康に対して影響が大きかった、とのことであった。私はこの知らせを聞くと、心配でたまらなくなり、何度もお手紙を差し上げたが、いずれもご返事はなかった。どうすることもできず、ただ心の中で一日も早いご回復を祈ることしかできなかった。1994年8月23日に杜維明教授が北京に来られ、陳老先生がすでに亡くなられたことを告げられたが、私はそれを聞くと愕然とし、涙が久しく止まらなかった。8月26日にドバリー教授よりの手紙があり、そこでは正式に、先生が8月12日にご自宅で逝去されたことを通知していた。8月30日にはさらに朱榮貴兄よりの手紙があり、それには『中国時報』の死亡記事も添えられていた。先生の御臨終の際の状況から見て、安らかに亡くなられたというべきだろうが、先生がこんなにも早く世を去られた原因が二年前の転倒にある事を思えば、惜しまざるにはおれないのであり、陳先生の三年前の御健康から見て、もしその時の転倒がなければ、先生の御寿命は百歳を超えたであろうことは、間違いのないことだったのである。その後数日は、黙然として、そのことを考えずにはおれなかった。

私が陳老先生を識ったとき、先生はすでに八十五歳であったが、先生は九十歳になっても

なお矍鑠としており、歩みは平常通りであり、思考は敏捷、筆力も素晴らしかったので、先生を知るものは皆、先生の御寿命が当然百歳に至るものと考えていた。先生は私の朱子研究に対して、非常に好意的であり、私は今でも先生が晩年私に送ってくださった書簡数十通を保管している。先生の人格は穏やかで親しみやすく、非常に謙虚で、後輩に尋ねることをお気になさらず、青年学者を教え導く風格は、今に至るまで私を深く感動させるものである。

アメリカは戦前と戦後初期において理学研究を重視しなかったが、1970年代において状況は一変し、コロンビア大学とハーバード大学とを中心として、新儒学と朱熹の研究が一時に盛んとなった。1977年、陳榮捷先生は海外での教学が四十年となった記念の時に、三首の詩を作ったが、ここではその第二を示しておく。

海外教研四秩忙、攀纏牆外望升堂。 海外の教研四秩忙しく、牆外より攀纏して堂に升るを望む。

写作唱伝寧少睡、夢也周程朱陸王。 写作唱伝して少なく睡るに寧〔やす〕んじ、夢もまた周程朱陸王なり。

廿載孤鳴沙漠中、而今理学忽然紅。 廿載孤鳴す沙漠の中、しかれども今理学忽然として紅なり。

義国恩榮固可重、故郷苦樂恨難同。 国を義とし榮を恩とするは固より重んずべきも、故郷の苦樂同〔とも〕にし難きを恨む。

「しかれども今理学忽然として紅なり」とは70年代のアメリカの中国思想研究の変化を指し、これは改革開放後の中国大陆でも同様に再現された。「写作唱伝して少なく睡るに寧〔やす〕んじ、夢もまた周程朱陸王なり」は先生の理学の先賢に対する憧れを如実に描写している。私は思うのだが、先生の生命の最後の二十年において、夢で見たものはただ朱子のみであり、先生は朱子の身の上にその生命と感情のすべてを注いでおり、朱子の研究はすでに疑いもなく先生の終極的な関心事となっていたのである。

私の心の中において、先生は疑問の餘地のない偉大な学者であった。私の理解の中では、その人格と精神的な境界とはすでに理学が崇拜し唱道する仁者の境界に達していた。今日、先生との様々な交流を思い返すと、私の内心は先生に対する深い思いで一杯となり、決して平静ではいられなくなるのである。